

河野道宏 東京警察病院副院長・脳神経外科部長・脳卒中センター長



【所在地】 東京都中野区中野 4-22-1 ☎ 03-5343-5611

【累積手術数(個人)】 小脳橋角部腫瘍・頭蓋底腫瘍 884 例(聴神経腫瘍 642 例)、脳動脈瘤手術 510 件(指導も含む)。

【年間執刀数(個人)】 小脳橋角部腫瘍・頭蓋底腫瘍 120~140 例(聴神経腫瘍 90~110 例)。

【科の特色】 良性頭蓋底腫瘍および脳血管障害の外科的治療を専門に行っている。聴神経腫瘍・小脳橋角部腫瘍・頭蓋底髄膜腫などの難手術を専門としており(<http://plaza.umin.ac.jp/KOHNO/>)、日本全国から患者さんが集まり、小脳橋角部腫瘍の手術件数は国内では飛び抜けている。すべての頭蓋底アプローチが提供可能である点に加え、厳密で高度な術中脳神経モニタリングを行うことにより良好な手術成績をあげている。脳血管障害の診療においては、外科治療と血管内治療の両者が揃っており、脳動脈瘤や脳梗塞の治療に幅広く治療が提供できている(t-PA 療法も可能)。医師スタッフの数も 10 人と大型であり、脳外科専門医 7 人を擁している。

【科の症例数・治療・成績】 年間手術件数 350~400 件。脳腫瘍は年間約 150 例で、ほとんどが聴神経腫瘍・小脳橋角部腫瘍・頭蓋底腫瘍である★聴神経腫瘍における最近 5 年間の手術成績は極めて良好で、平均腫瘍切除率 97.6%で、顔面神経温存率 99.5%(機能温存率 98.1%)、有効聴力温存率は 71.8%といずれも高率。持続顔面神経モニタリングと持続聴覚モニタリングを駆使していることと、豊富な手術経験が良好な手術成績を支えている★未破裂脳動脈瘤や破裂脳動脈瘤(くも膜下出血)に対しては、外科手術と血管内治療を患者さんの状況により使い分けて治療している。最近 7 年間の治療実績は、248 動脈瘤に対して外科手術(開頭クリッピング)150 例(60%)、血管内治療(コイル塞栓術)98 例(40%)で治療し、未破裂動脈瘤での運動麻痺の出現率は 1.9%と低率で良好な治療成績である。バイパス手術も専門としており、脳動脈瘤の治療手段はすべて揃っているため、治療に自信をもっている。

【外来診療】 月~土の午前。初診受付は午前 8 時 30 分~11 時。河野=水・金と第 2・4・5 土。水・金の午後には聴神経腫瘍・頭蓋底腫瘍の初診・セカンドオピニオン外来(要予約)。

【セカンドオピニオンの受け方】 紹介状と MRI や CT などの検査データを用意した上で、代表に電話して河野の専門外来の予約を取りたい旨を伝えると予約センターにつながる。あらかじめ、相談内容を河野に伝えることも可能(e-mail: mkouno-nsu@umin.ac.jp)。

【略歴】 1961年大阪生まれ。80年神奈川県立湘南高校卒。87年浜松医科大学卒業後、東京大学脳神経外科入局。国立病院医療センター（現・国立国際医療研究センター病院）、東京大学医学部附属病院、茨城県立中央病院、都立神経病院を経て、95年富士脳研病院部長。04年より現職・東京警察病院部長。07年より脳卒中センター長、08年東京大学医学部非常勤講師、11年より東京警察病院副院長を兼務している。

【所属学会・資格】 日本脳神経外科学会（専門医）、日本脳神経外科コンgres、日本脳腫瘍の外科学会（評議員）、日本頭蓋底外科学会（評議員）、日本脳卒中学会（専門医）、日本脊髄外科学会（認定医）、医学博士（99年・東大）。

【著書・編集書・論文】 英文論文 18編、和文論文 44編。

【手術に際して心がけている点】 自分が患者であった場合に、最も受けたいと考える手術を提供すること。

【診療中に心がけている点】 手術が難しい疾患でも、あきらめることなく一緒に治していこうという前向きな姿勢で患者さんと接している。患者さんの心情に配慮することを忘れない。

【名医の条件】 高い技術と良好で豊富な実績を持った上で、患者さんに安心感を与えることができる医師。自分の過去にうまくいかなかったケースを絶対に忘れず、同じことを繰り返さない医師。

【趣味】 ゴルフ、野球。

【特技】 持続できる高い集中力。短い睡眠時間でも元気で活動できること。

【私の健康法】 毎朝の素振り（ゴルフ）。

【もし医師でなかったら…】 生物学者かプロスポーツ選手（ゴルフ・野球）。